



▼ パンデミック後の世界に ▼

校長 阿南 孝也

新型コロナウイルス感染は世界中の人々に影響を及ぼしていますが、特に弱い立場に立たされた人々への被害が大きい、そう感じています。昨年創立記念日に講演いただいた「NICCO 日本国際民間協力会」による「シリア難民支援事業」は、ヨルダン国境閉鎖のために、子どもたちへの支援事業がストップしていると同じました。

京都市内で野宿生活を強いられた方々も、コロナによって厳しい状況に置かれています。一人当たり10万円の「特別定額給付金」受け取りが困難な方がおられました。様々な事情から住民票確認が困難な場合、申請が難しいのです。「路上生活をしているのは自業自得なので、給付金をもらえるだけありがたい」(8月5日京都新聞)とありましたが、住み込みで働いていて病気で仕事を失った人、保証人となって財産を失くした人、精神的に追い込まれて仕事ができなくなった人など、ホームレスとなった原因は様々です。直接お話を伺ってみると、貧困の連鎖を感じることも多く、自己責任とは言えない不平等を強く感じます。

パンデミックからの遅々とした困難な回復を待っている今は、遅れて背後にいる人々を忘れる危険があります。より悪質なウイルス、無関心なエゴイズムというウイルスに侵されるかもしれない危険です。自分にとってよければ生活が改善しているという考え、自分にとってよければすべてよしという考えによって拡散されるウイルスです。そこから始まり、とどめは、人を選別し、貧しい人を切り捨て、発展という祭壇に後進の者を犠牲として供するのです。ですが、今回のパンデミックが思い出させてくれるのは、苦しむ人の中には、違いも隔たりもないということ。『パンデミック後の選択』教皇フランシスコ より

神の愛ゆえに創造されたすべての人が大切にされる社会の実現を祈ります。洛星で学ぶ生徒たちが、仲間と切磋琢磨しながら、勉学、学校行事、課外活動に励む日々を通して、神からいただいた賜物を研ぎ伸ばすことができますように。そして、生涯へりくだって友なき者の友となってくださったイエス・キリストに倣って、人々の幸せ実現のために働く青年として成長してくれることを願ってやみません。

— 前期末考査を終えて —

困難な中であって、感染予防に最大限の注意を払いながら、文化祭や体育祭を見事にやり抜いた洛星の生徒たちの個々の力、集団の力に改めて感心されました。校長として彼らを誇らしく思っています。

定期考査は、事後の対応が大切です。生活を振り返り、改善すべきことを具体的に考えて実行して欲しいと思います。学校生活や家庭生活全般に目を向けて生かしてくれることを期待しています。

* 新型コロナウイルス感染症にかかわり、ご心配をいただきありがとうございます。学校として、より一層の感染防止に努めてまいります。ご理解ご協力をお願いいたします。